座長のまとめ

第１群の座長をつとめて

東　口　和　代
（金沢医科大学病院）

第13回石川看護研究会第１群５発表演題のの座長を務めさせていただきました。各演題の発表内容については，紙面の都合上，詳細に述べることはできないので「石川看護研究会誌第10巻第１号」を参照していただきたい。

今さら言うまでもないことですが，身体的な健康問題を抱える患者さんも，その背後には多くの精神的・心理的健康問題を合わせ持っています。それらの問題に私たち看護職者が深く食い込んでいき，共に解決の道を考えていくことが，質の良い看護ケアを提供できる看護職者であると思います。しかし，この点で最も思い悩み，立ち止まってしまうのが臨床の看護職者の姿とも言えます。ここで一歩足を前に動かした人たちが，社会保険鳴和総合病院の池端よう子さんたち，金沢市立病院の口田富美代さんたち，公立加賀中央病院の道場委希子さんたち，金沢大学医学部附属病院の川端稔さんたちであったと思います。臨床の看護職者として仕事をしながら，それだけに踏みとどまらず，大いに動機づけをされ，看護研究を計画・実践し，それを院外発表にまで完成させていった皆さんの姿を見ることは，私も含めて，会場に集まった仲間には大きな刺激になりました。

ところで，研究をするとは”真理の探求”をするということです。いざ，研究をすると決めたからには，この真理の探究がどこまでなされているか，つまり，文献検索を研究の第１段階として，独創性のある研究目的を提示し，説得力ある研究方法をもって研究を進めていくことが必要であると思います。この研究デザインという点では，リハビリテーション加賀八幡温泉病院の中田恵子さんらの研究が，良い手本になるのではないかと思います。特に，これは２年間にわたる縦断研究であり，その努力と忍耐に感服いたします。

看護する心を研究という科学する心に結びつけていくことも，私たち看護職者に求められている役割であると感じた１日でした。